

巻頭言

茗溪塾

2007.11月号

茗溪塾教務部 03-3659-8638

ヘラクレス、初めての休暇

茗溪塾塾長 宇野雅春

TV画面に小さな男の子が映っています。英語ではない外国の言葉が流れています。字幕を頼りに見ているとどうも父親が小さな子供になにやら命令している様子です。チャンネルを切り替えようとしてふと手を止めました。普通の家庭の団欒とは違うものを感じて、目が離せなくなりました。父親は、両手で持ってやっともてる位の大きさの円柱型の金属の塊を3個ばかり、白い布袋に入れて子供に渡しています。「これで〇〇（日本円で90円）になるはずだ。」と言いながら自分はたばこをぶかぶか吸っています。子供は、これまでも鉄くずを集めては売って家計の足しにしていたということで、ちょっと嫌だなと思いつつも父親の命令に従おうとしています。（自分の子供なら、ちょっとした買い物を頼んでも、嫌がるばかりでなくきっぱりと断られそうな気がして、ますます興味が引かれました。）母親もそれを当たり前のように見えています。アルミニウムだという金属の袋を背負って出かけた男の子ですが、途中で何度もボロリと落としながらいくのでハラハラさせられます。7～8歳くらいなのか、もっと小さくも見えます。

金属の重さに耐えかねてか、途中からシャツの前に金属を置きシャツのすそを手繰り寄せてよたよたと歩いていきます。買い取り業者の家までは距離もあり、なかなか着きません。男の子は半分泣きそうな顔をしています。やっとたどり着いて、笑顔が戻ります。しかし、出てきた若い男は「大人と一緒にないとダメだ!」と拒否。男の子は「盗んできたんじゃない!」と必死で懇願しますが、結局はあきらめざるをえませんでした。見ている私でさえ「なんで大人が自分で行かないのか!」と腹立たしい気持ちになりました。

男の子はまたその重い荷物を担いで帰路に着きます。大任を果たせなかった悔しさとまた繰り返される帰りの歩行を考えて男の子は途方に暮れてしまいます。「どうしよう」という心配顔は、そのうち泣き顔になってしまいます。

ポーランドの炭鉱労働者の失業家庭のドキュメンタリーで男の子の名前はヘラクレスです。

ここまでの放映で大きな反響があり、ヘラクレスを「休暇」に一緒に連れて行きたいという夫婦が現れます。ここから後編が続きます。

この申し出による「初めての休暇」にヘラクレスは大喜びです。迎えに来た夫婦と荷物を持って出て行くとき両親は複雑な態度を取ります。休暇に連れて行くのが親ではなく他人であることへの後ろめたさなのか、仕事をしない夫を母親がなじったりします。ヘラクレスが喜び勇んで出かけた後の寂しい静寂が、逆にかけてがえのない息子への思いを駆り立てたようです。避暑地向かう車の中ではホームシックになって泣いてしまったヘラクレスと意気消沈する両親の様子が交互に映し出されます。

しかし、その後のすばらしいバカンスにヘラクレスは、すっかり魅了されます。おいしい食事、アイスクリーム、初めて見る海、テレビのアニメ等…新しい物に触れたときのヘラクレスの感動や喜びが、彼特有の表現で語られる時、それはとても生き生きと豊かで魅力的です。ヘラクレスが賢い子であることが分かります。

しかし、その夫婦は、徐々にヘラクレスが字を読めないことや、目がよく見えないことに気がつきます。家に送り届けた夫婦は、必死でヘラクレスの両親を説得しようとし、鉄くず拾いをやめさせて、学校に行かせること、そして医者に行って目を検査してもらうことの2つです。そのための援助も申し出ます。普通の親なら二つ返事で感謝するだろうことなのに、のりくりに話は進んでいきません。「俺の子なんだから、このままでいい」という父親に、夫婦のお父さんの方が厳しく言います。「ヘラクレスには将来がある」ということ。「このまま字が読めなくていいとは思えないこと」そして「もっといい未来を与えるべきだ」ということを強く主張します。しかし、大きく変えられない切迫した生活の重さが、交わされる言葉を飲み込んでいくように曖昧に会話は中断します。その日から、ヘラクレスは鉄くず拾いには行かなくなります。その夫婦の資金援助があったからのようなのです。でも、本人は鉄くず拾いに行きたがりです。普通の少年と同じようにその動機は「サッカーの靴」を買いたいためにです。ドキュメンタリーは何の説明もなく淡々と映しているだけで終わります。「世界の子供」というシリーズですが、つくづく子供の置かれている状況の「格差」というものを感じました。日本でもこんな家庭がないとはいえないと思いつつ、もう一方で、全ての充足を与えきった後で、「勉強」や「仕事」だけはやりたくない…という子供と向き合って悪戦苦闘する一部の日本の親も「大変だなあ」と思わずにはいられませんでした。

おおかたの親がうれしいのは、頑張っている子供を見ているときです。何で!と聞き返されそうですが何とも説明できません。いずれ親を抜いて未来に羽ばたくことを願っているからかもしれません。